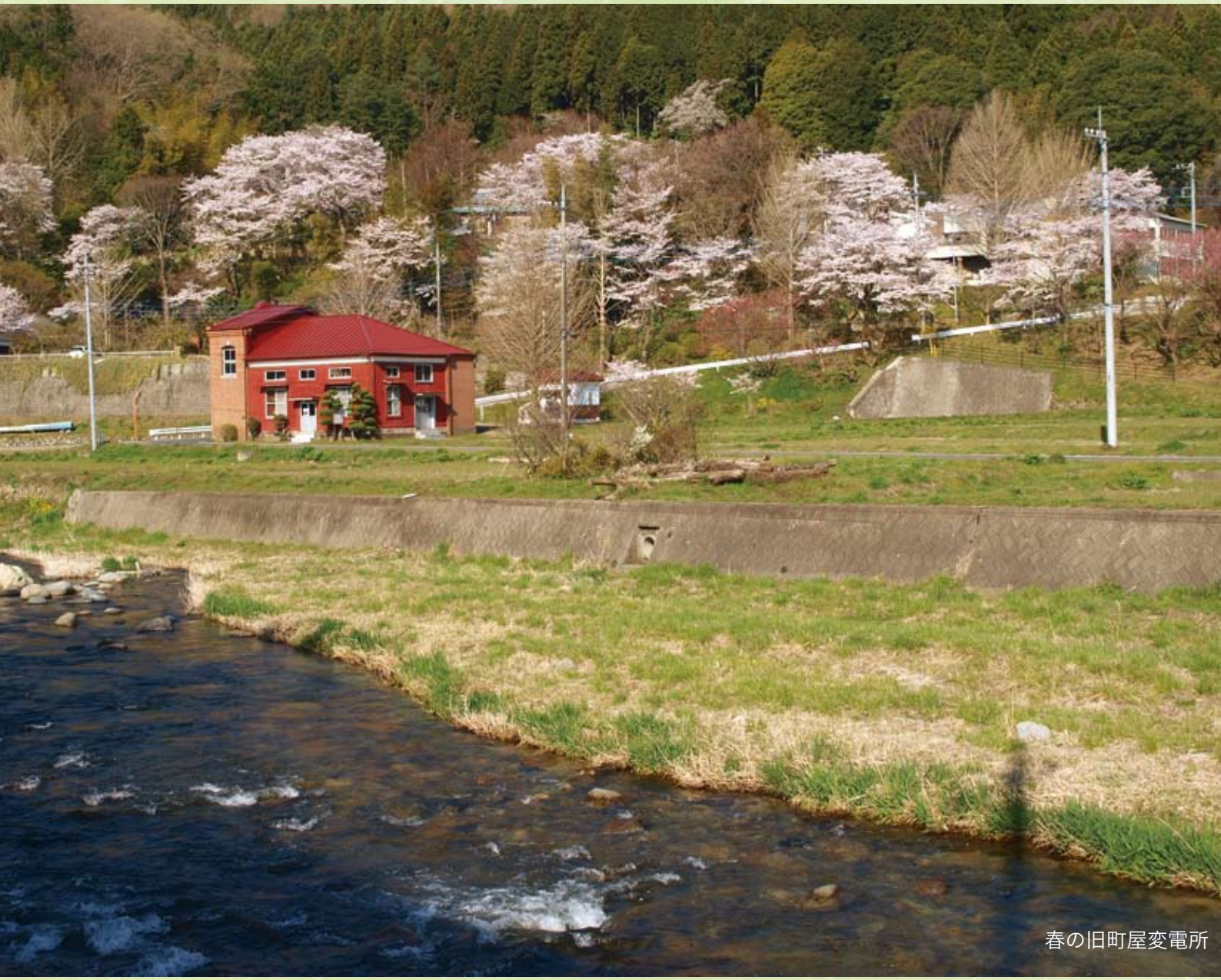
河内の
ふるさとを探る



春の旧町屋変電所

常陸太田市　河内の文化遺産を守る会

発刊に寄せて

河内の文化遺産を守る会　会長　平山　泰弘

河内の文化遺産を守る会は、「旧町屋変電所」の建物を保存活用することから始まりました。

町屋変電所は昭和三十一年に業務が廃止され、その施設は地区の公民館として利用されてきましたが、平成四年に新しい公民館が完成し、変電所の建物は解体されることとなりました。レンガ造りの貴重な建物を壊すのに忍びないと地域の有志が立ち上がり、熱意をもって保存活動を行った結果保存されることになりました。

十数年経た今日までに旧町屋変電所を中心に守る会では「赤レンガと銀杏まつり」を開催し、幻想的なイベントとして大勢の人々に親しまれています。

河内地区には、歴史的にも文化的にも地域資源がたくさんあります。また、三十数年前に発行された地域の史跡を紹介した冊子も見つかりました。先人の遺した資料を基に守る会として地域の有形無形の資源をまとめあげようということになり、会員の活動が開始されました。会員が足で、目で、耳で、地域内を隈無く廻り、大変な時間と労力を費やして作り上げたものがこの『河内のふるさとを探る』です。

発刊にあたって、会員の労を惜しまない活動に敬意を表し、また、地域の諸先輩の方々の情報提供、ご指導に対しまして心から感謝申し上げます。

この冊子が、地域の方々の再認識で活性化の一役を担えましたら幸甚です。

河内の文化遺産を守る会　顧問　和田　弘

ふるさとをこよなく愛する者にとって郷土のことについてより深く知りたいと思うのは、当然のことと思います。

私たちが生まれ育ったふるさとの景観の美しさは、住む人々の心情も反映されて素晴らしいものがあります。そのなかに、先人の築かれた伝統や有形無形の歴史が刻まれ、碑や冊子等として色々なものに置き換えて遺されてきました。

河内地区は文化や教育の向上に熱心なところで、その実績は内外から高い評価を受けており、歴史の重みをもった地域です。その貴重な遺産を改めて探り、保存の重要性を再認識し、検証を含めて多くの方にご協力を仰ぎ、このたび再編集を兼ねて本著の発行に至りました。誠に喜びに堪えません。

地域遺産を後世に引き継ぐことが私たちの使命と考えておりましたから、地域の方々のご協力や会員の努力がここに結実し、地域の持っている高い資質が発信できるものと確信いたします。

発行に当たりましてご苦労なされました方々に敬意を表しますとともに地域のますますの発展を祈念いたします。

目次

河内地区の概観 …… 3
一　水戸国府記 …… 4
二　水軒翁碑 …… 5
三　平山君遺徳碑 …… 6
四　寿蔵碑 …… 7
五　吉田君父子頌徳の碑 …… 8
六　龍城根本翁彰功碑 …… 9
七　檜山義親君紀念碑 …… 10
八　町屋小学校 …… 11
九　西河内上小学校 …… 11
十　河内小学校 …… 11
十一　鎌倉坂と黒磯岳 …… 12
十二　薬師堂（福寿院廃寺） …… 12
十三　吉田神社 …… 13
十四　町屋金山跡 …… 13
十五　不動尊 …… 14
十六　熊野神社 …… 14
十七　町屋橋 …… 14
十八　旧町屋変電所 …… 14
十九　央橋（なかばし） …… 15
二十　富士神社 …… 15
二十一　金砂山道の碑 …… 16
二十二　智教院 …… 16
二十三　お越し場 …… 17
二十四　加波山権現宮 …… 17
二十五　有長（永）地蔵尊 …… 17
二十六　ケンギョウチ寺跡 …… 18
二十七　金砂大道山大石 …… 18
二十八　石裂山（お作さん） …… 18
二十九　愛宕神社 …… 18
三十　笹原地蔵尊 …… 19
三十一　御子（巫女）入不動尊 …… 19
三十二　割石 …… 19
三十三　文字部供養塔 …… 19
三十四　天満宮神社 …… 20
三十五　万宝地蔵尊 …… 20
三十六　二十三夜尊 …… 20
三十七　高宮神社 …… 21
三十八　浅畑地蔵尊 …… 21
三十九　金壺神社 …… 21
四十　三嶋神社 …… 22
四十一　三岫春日神社 …… 22
四十二　笹原春日神社 …… 22
四十三　仲沢地蔵尊 …… 22
マップ①町屋町・西河内下町編 …… 23
マップ②西河内中町・西河内上町編 …… 24
あとがき・参考文献 …… 25

河内地区の概観

① 地域の産業

常陸太田市の中央部（旧常陸太田市北部）に位置する河内地区は、里川が形成した谷沿いに、南北に走る棚倉街道の宿場町として栄えた。町屋町の中心には、昭和三十年の市政施行以前の旧河内村時代に村役場が設置され、行政の中心地でもあった。

農林業が主で、昭和の中期までは養蚕や葉煙草耕作、木炭の生産が盛んに行われ、農家の現金収入の源となっていた。

工業では、明治の初期のころから町屋富士山などで斑石の採掘が行われ、斑石販売会社が設立されていた。特に、斑石は瑞龍山水戸徳川家の墓所にも使われており、三代藩主綱條以降の墓石として知られている。

商業は町屋宿通りに、最盛期には最大九件の旅館が営業し、多くの飲食、娯楽施設が軒を連ね、大変賑やかだった。平成の現在は、部品工場や食品加工会社などもある。以前には従業員二〇〇名を超す食品製造工場も操業していた。

② 交通と人口

昭和の初期までの棚倉街道は、常福地から春友、鎌倉、太郎坂と山沿いを通り、里川を渡り、台、古宿と川沿いに町屋宿へと入った。昭和二年に鉄筋コンクリート造りの町屋橋が竣工、昭和十二年にアーチ型の央橋（なかばし）が完成し、新道として主要道となった。

往時の棚倉街道として利用されたこの道は、昭和九年の水郡線全通によって大量輸送の時代を迎え、主要道としての地位が低下し始めた。

さらに、昭和十九年（一九四四年）の町屋町中心部の大火により多くの商店が焼失した。すぐに復興を果たしたが、近年は経済環境の変化やバイパスの完成から、宿通りの交通量は激減した。しかし、宿通りを流れる江川は、防火や生活用水として長く利用され、町屋宿の家並みと調和し、今でも旧宿場町の面影を強く残している。

人口は明治の中期には、三百余世帯二千百余人が生活していたが少子高齢化に伴い、平成二十二年一月現在では五百四十一世帯千三百九十六人となっている。

③ 文化について

祖先がこの地に入り、山野を切り開き、多くの困難に打ち克ちながら山紫水明の地を作り上げた。

古くから交通の要所であったことで情報がいち早く伝えられたためか、教育の重要性を感じ取り、多くの文人により私塾が形成され子弟教育が盛んに行われ、要職を兼務しながら郷土愛を育み、地域発展のために尽くされた。（往時は町屋宿通りに棚倉街道では太田に次ぐ札所があった。）

西河内地区は、山間の農林業を中心に生活してきたところで、金砂山に参詣する道路としても利用され、寺社跡の多いことでも信仰厚いことが判る。結束力に優れ教育文化の香り高いところである。

その礎は、後述の先人を紹介する文献や地域内に点在する多くの史跡からも垣間見ることが出来る。

一　水戸国府記

マップ①の1

（正二位　勲二等　徳川昭武　題額）

水戸藩の「水府たばこ」が振興したのは、町屋村の和田治兵衛が、鹿児島県の「さつま煙草」の種子四種類を求めて培養し、その繁殖、乾燥の方法を研究して、文化十年に烈公の父君である武公に献上して、その成果を認められ、これを世に出したいわれが書いてある。

その乾燥方法も、従来の葉だけを縄にとじて連乾したものを、幹のついたまま葉を屋内につるして乾かす方法をとった。結果は、香気も色つやも、連乾しに勝っていたという。そこで、商人が争ってこれを買ったということが書いてある。

水戸国府とは何ぞ。水戸煙草の名称なり。煙草なるもの、全国の産地頗る多く其の額最も夥し。しかして常陸久慈郡及び近接地方に産するものもまた少なからず名ずけて曰く赤土、曰く達磨、曰く何、曰く何と。なかんずく品質絶佳にして、声価ある者、呼ぶに水戸国府と薩摩国府とを以てし、世に並らび称せらる。是れもとより地味栽培に適する所、然らしむと雖も、乾燥其の宜しきを得ざるや、香気薫ぜず、色沢麗しからず。いずくんぞ能く此の栽に至らんや。其の乾燥の法を考案し以て今日の陸運を開きしものは、和田翁の工夫に係ると云う。翁名は治兵衛、久慈郡町屋の人なり。初め此の地方乾燥煙草なる先ず其の幹を去り、其の葉を採り、これを縄に挟んで以て日光に晒す。即ち之を聯乾と謂う。

其の方法たるただに香気を減じ色沢を失なはざるのみならず、たまたま霖雨（長雨）あれば則ち湿潤自ら加はり、ついに腐敗に帰す。

其の損害実に測る可からず。翁嘗て之を憂ひ、苦辛工夫茲に年あり、以って発明する所あり。文化七年を以て始めて幹乾を創む。すなはち幹葉共存して之を屋内に掲げて日射を假らず、燥かすに風力を以てす。香気之がために能く薫じ、色沢之が為に能く麗し。毫も腐敗の跡を見ず。其の成績聯乾の比にあらず。翁之を太田市場に沽る。商賈購うて之を藩主鶴山公（武公のこと）に献ず。公之を嘉みし、すなはち家老芦沢元昇をして鹿児島候に謁し、薩摩煙草の種子を需めしむ。因りて其の四種を得。曰く車田、曰く伊勢屋敷、曰く龍王、曰く砂走。以て翁に賜ひ、奬励つぶさに至る。翁其の厚恩に感じ、夙夜励精播種施肥す。苗の秀れて良き者を擇んで之を図る。蕃殖乾燥の方法もまた研究を積み、経営年を累ね以て名葉を収穫す。

是れ水戸国府の濫觴（はじめ）たり。十年辛酉に至って、翁又之を公に献じ其の効果を告ぐ。特に之を遠邇に輸す。ここにおいてか声価大に揚る。ここに至って薩摩国府に能く遜色なし。後翁此の種子を州郡に頒ち、且つ教ふるに栽培乾燥の方法を以てす。ここを以て、煙草の耕作漸く熾んに幹乾もまた大いに行なわれ、供給需要ますます多きを加ふ。斯業愈々発展し以て国利民福と為す。則ち翁の力、多きにあり。抑も産業の起る一朝一夕の故にあらず、大抵先覚の士、辛苦惨澹、経営の功を積み、以て其の魁と為る。水戸煙草業 洵に翁の之を開隆運するに因る。其れ後人、其の由来する所を知り、其の本に報ゆる所以を思はざる可けんや。今や郡内有志胥謀り乃ち貞珉（石碑のこと）に勒し（刻む）以て其の功績を表す。

公四世の孫鑾山公（昭武、節公のこと）親ら水戸国府記の五字を其の額に題す。嗚呼翁の光栄また偉ならずや。余既に其の拳に賛し辞せずして其の由を記することかくの如し。

明治四十一年十月

従五位勲四等　高橋　諸随　撰

根本　龍城　書

二　水軒翁碑

マップ①の12

（前文部大臣・衆議院議長　正四位　勲三等　大岡　育造　題額）

西河内下町出身である石川又衛門義政、水軒先生の伝が書いてある。

先生は、加倉井砂山先生や藤田北郭先生に学び、後に教育者として郷里に帰って、家塾をおこし郷里の子弟を教育し、その塾には常に百人からの弟子が出入りしたという。

その弟子を可愛いがり教育したことは数限りがなかった。

一面先生は、郷里の要職も兼ね、公事に尽すことも大きかったという。

先生諱は義政、又衛門、水軒は其の号。石川氏は里正、諱は甚之衛門君の孫なり。文政三年八月二十有八日を以て茨城県久慈郡河内村西河内下に生まる。資性温厚篤実。幼にして岐嶷（才智が人よりすぐれていること）す。初め水藩加倉井淡路に贄し（弟子入りすること）経書を学ぶ。後藤田北郭の門に入りて史籍を修む。学成りて郷に帰り、専ら産業を治む。家運日に隆んなり。時偶水藩紛争の事あるや、先生藤田主膳を佐けて、操履（おこない）淳正稍功あり。爾後教育に注意し、福島県槇野村に聘せられ、学舎を開いて居ること数年にして郷里に帰り家塾を興す。蒙を発し瞶を啓らく。遠近相伝えて弟子恒に百を以て数うるに至る。教訓懇ろに到り、愛育最も備はる。一たび門に候ふ者、なお慈父を慕ふがごとし。温情想ふべし。先生また郷里の要職を兼ね公事に尽瘁すること甚だ多しとなすなり。即にして嗣子又次郎をして家事を為さしむ。閑散自適、晩年を楽しむ。明治三十有八年十一月二十二日を以て郷に卒す。河内村西河内下の先塋の側に葬る。享年八十有六。天寿を全うすと雖も亦哀しいかな。維れ歳大正戊午一月、門生哀慕し、知有を謀りて其の碑を建て、以って遺徳を後人に告ぐ。

大正七年一月

衆議院議員　勲三等　根本　正　撰並に書

三　平山君遺徳碑

マップ①の5

（正二位勲一等侯爵　西園寺公望　篆額）

天保六年に町屋に生まれ、平山寛叔栗町屋東湖と称せられた。
平山東里先生の事蹟を板垣退助先生が文を書いて、東里先生の息子さんが記したものである。

茨城県の有志、東里平山君の事蹟を石に勒し、之を永久に伝えんと欲し、其の行状を持し来り請う。予嘗って君と相識り誼す。辞するを得ず。乃ち其の状を案ずるに曰く、君諱は寛、字は叔栗、東里は其号なり。通称は政平、後尭三郎と改む。天保六年十二月、常陸国久慈郡町屋村に生まる。資性剛毅なり。年爾て十七、藤田東湖に従ひ、経史を講ず。

又弘道館に入り、剣法を千葉、渡辺諸氏に受く。

嶄然として頭角を見す。東湖最も君を愛し以て他日大いに用うべきと為す。嘉永六年米艦浦賀に来る。君、東湖に従って江戸に抵る。東湖の世を謝するに会ひ、君乃ち郷里に還る。先師東湖の遺志を継述し、専ら尊王の大義を唱ひ、大いに志気を鼓舞して時機を俟つこと久し。

桜田の挙、斉藤監物書を以て君を招く。君之に赴かんと欲し偶々眼を患いて果たさず。後常に以て遺憾と為す。元治元年水戸藩の俗論堂政柄を執り、正義の士を陥擠せんと欲す。

君慨然として江戸に赴き、藩主に請うに、賢を進め奸を退け藩政を一新するの事を以てす。明治元年王師に従いて、長岡、三条等の地に転戦し殊功あり。二年函館追討軍の命に従う有り。

未だ発するに及ばずして事平らぎ、郷里に帰伏す。これより、意を仕進より絶ち、村治に拮据すること二十有余年、一日の如し。憲法の施行に会う。在近を採して政党の闕く可からざるを知る者鮮し。君おもいらく、国既に憲法有り、豈に政党なかる可けんやと。

乃ち同志を糾合し以て愛国公党に入り、第一期帝国議会、冗費六百五十万円を減ず。君之を以て教育資金と為し、各府県に分布せんと欲す。乃ち請願書を作り、将に之を両院議長に上つらんとす。第二期議会解散に会し、即ち止む。君夙に育英の志有り。晩年家塾を其の郷里に開らき、晩翠義塾という。傍ら武場を設け、文武を奨励す。遠近教を請ふ者あつまり至る。君の人を教ふる忠孝を以て本と為す。常に忠孝不二の理を説き、且つ忠臣孝子の事蹟を挙げ、之を鼓舞振励して諄々として倦まず。門下有用の材を出すこと尠からずと云う。

四十二年三月、病を以て終る。是より先、予の将に愛国公党を起さんとするや、君遠く茨城より神戸に来り、予を諏訪山の寓居に訪ね、当世の務を論ず。其の貌、凛乎として、侵かす可からざるの色有り。しかして其の辞激切愛す可し。予深く其の志の誠にして篤きを感ずるなり。いくばくも無くして予を招きて、自由の大義を其の郷太田町に演ぜんことを請う。同志会する者一万余人、予窃に其の成んなるを驚く、其の後、茨城県に競いて自由党に入る者続出す。蓋し、君興かって大いに力あり。乃ち同志の請に応じて君の平生を叙列することかくの如し。其の令開遺徳に至っては、なお地方人士の耳目に存す。敢えて予の讃辞を要せざるなり。

正二位　勲一等伯爵　板垣　退助　撰文

男　亮　謹書

四寿蔵碑

マップ①の5

（正五位　勲四等
力石　雄一郎　篆額）

これは町屋の村長であった和田利八郎先生の事蹟を称え、これを伝えたものである。

和田氏は弘化二年十月十一日に生れ、剛直にして節義を重んじ、村会議員、人民総代、収入役等を歴任して村長に推され、尚土木事業や、警察等に数回にわたり献金して褒賞をうける。

質実剛健な人生を送り、終始人の為に尽したことが記されている。

庚子春余常陸に遊び、根本龍城家に寓す。人あり来り謁す。その姓名を問ふに、曰く吾れ天下の狂生なりと。余その言を奇とし、之を堂に延く。酒気醺々酔郷の徒の如し。ともに語れば すなわち慷慨淋漓。いわゆる衆人皆酔い、我れ独り醒むる者なり。余益々その人となりを奇とす。数日を越えて龍城余に謂ひて曰く、さきの狂生は和田翁となすなり。このごろ寿蔵の碑を建てて、以って狂名を後世に伝へんと欲す。子父以って之に記さんことを願ふ。状を按ずるに、翁名は理明、通称利八郎、小字は己之松。弘化二年十月十一日を以て生る。人となり狷介にして剛直。夙に高山正之、木村謙次の風を慕ひ、権貴に媚び、節義を失する者を視ては、これを悪むこと蛇蝎の如し。嘗て村会議員、人民総代、収入役等を歴任し、能名あり。後、村長に推さる。翁胞兄東八郎をすすめて己れに代う。その友愛謙譲又かくの如し。翁自ら奉ずるに甚だ倹なり。衣帛を用いず、履桐を用えず。然れども公に奉じては吝ならず。征清の役に軍馬を献ぜんことを請う。聴されず乃ち金を献じて之に代う。その他、土木警察等の費を献ずること前後数次、屢褒賞を蒙る。これによりてこれを観れば、翁の行事一として不正なし。何ぞこれを狂生と謂はむ。しかして翁自ら天下の狂生と謂うなり。蓋激すれば所有りて然らんや昔鄭食その漢高を見て我れ狂生にあらずと謂ふなり。夫れ匹夫の身を以て万乗の君を見て我れ狂生にあらずと謂う也。其の言己にこれを狂視するなり。翁自ら天下の狂生と謂うや、孰か狂、孰か正か能くこれを弁ずる者あらん。嗚呼人孰か寿を欲せざらん。然れども行事の伝ふべき者無ければ、則ち碌々瓦金、何ぞ貴ぶに足らんや。苟も伝ふべき者あらば芳名赫々万世に伝うる。翁の行事の如し。余いずくんぞその請を辞すべけんや。その梗概を叙することかくの如し。

大正七年三月　上浣　　山田重光　撰
根本龍城　書

五　吉田君父子頌徳の碑

マップ①の2

（従四位　勲四等　侯爵
徳川圀順　篆額）

これは河内村の吉田神社の神主であった吉田主水父子の功績をほめたたえたものである。
幕末多難な時に生を受けて国事に奔走をし、大いに功をあらわした。後に本村の小学校に勤め、子弟の教育に尽力して一生を終った。
子息の明正先生は父の志を継ぎ、また本村小学校の校長となり、郷人を教え導いた功をたたえたものである。
水戸の学者二人の手によって、この碑ができた。

水戸烈公夙に（早くから）弘道館を設け、忠孝無二文武不岐之説を以て、一世を振作す。其の化の及ぶ所、往往篤学忠厚の士を出す。吉田君父子の如きも亦其の一也。君名は明允、字は子誠、主水と称す。吉田氏考諱（父の名）は峯琇君といふ。其の長子なり。家世常陸久慈郡河内村吉田神社祠官たり。君性剛毅にして惇篤なり。幼より読書を喜び、父母に事えて至誠有り。少壮豊田天功に従ひ、経史を研鑽し、渡辺政直に従ひ、剣法を講究す。天保八年祠官となり、烈公の鋭意治を図るに会う。弘道館新に成る。君を召して経を講ぜしめ金賞を賜う。その篤学に又俸米十苞を給す。君常に郷里の子弟に教えて諄々倦む無し。弘化元年烈公譴を被むる。君是れ我が身を致すの時なりと謂ひ、死を以て自ら誓ひ奮然として江戸に到る。参政大岡候の駕を遮り、上疏して其冤を訴う。不敬に坐して獄に繋がる。幾ばくも無くして赦に遭ふ。君桑原信毅、吉成信貞、大胡資敬等と親善常に相往来し、挽回の念、未だ嘗て少しも衰へず。各地に潜匿して艱辛備に嘗むること二年二月、又、書を諸藩候に呈し冤を訴う。戸田忠敞、歌を贈って其の忠誠を賞す。安政二年、俸米十五苞を賜はり、謁見を許さる。明治十五年八月二十五日病没す。年六十有四。男名は明正、字は直郷、主計と称す。志操堅実、自ら父の風あり。道を豊田天功に問ひ、剣を渡辺政直に学ぶ。嘗って書を小菅郷校に講ず。会環山公子（烈公の十四子、従三位松平昭訓）之に臨み杯酒を賜う。文久三年将軍家茂入朝し、君順公（十代慶篤）の駕にしたがって上京す。元治元年、武技精練を賞して礼服を賜う。秋八月松平大炊頭に従って将に水戸城に入らんとす。市川弘美等、兵を出して之を拒ぐ。遂に転戦して那珂湊に至る。後、郷に還り家職を襲ふ。又子弟を教う。維新の後、本村小学校教員となり、在職前後四十年。其の勤勉猶一日のごとしと云う。明治三十七年病歿年六十有一。男名は弘、本村小学校長となる。郷人二君薫陶の恩を追慕し、碑を立ててこれを不朽に伝えんと欲し、文を余に請う。余其の功を韙し、乃ち事蹟の梗概を叙し、之に係くるに銘を以てす。銘に曰く先業を継述し、神明に奉仕す。維れ忠、維れ孝。一に至誠を以てす。父に子たり。各々寵栄を家むる。文に修め武を講じ、並びに篤行有り。里川の上、豊碑晶宝。清流活活、長く頌声を伝う。

大正七年九月

水戸　栗田　勤　撰文
北条　時雨　書

六　龍城根本翁彰功碑

マップ①の4

（菊池謙二郎　題額）

町屋の根本健介龍城翁が斑石を世に出して、その名を宣伝し、成功したことが記されてある。

翁は努力家であり、事業に対する手腕がすぐれ、なお筆もすぐれており八十才を過ぎても筆勢がおとろえず、ますますさえていたといわれていた。

天恵人力相待ちて始めて利用の効を全くす、斑石採掘の如きは其の好例なり。

常陸国久慈郡町屋一帯の地石材を包蔵す、其の質堅緻其の色潤沢斑紋亦雅致あり古来斑石の名を以て知らる。然れども之を採掘して世の利用に供せしものなし、爰に人あり氏は根本名は健介、号を龍城という。町屋の産なり、夙にこの事業に着眼し、明治五年三月に至り河内村町屋字藤山蝮沢、鳥居前、遠藤沢、東河内村字八株沢、西河内下入文字部及び佐都村春友字樋場等すべて三十六か所の抗区採掘の許可を請い待て直に開抗に着手し販売の途を講ぜり、八年十月業務拡張を図り佐藤信熙、斉藤利幸、平山　寛、吉田明正、大森林蔵、檜山義親、檜山敬次郎等と相謀り常陸斑石会社を創立せり。九年四月副戸長並に戸長代理の職を辞し一意斯業に尽し十四年十一月更に会社組織を変改し独自専ら経営の任に膺り益々販路を遠近に拡め業績大に挙れり。此の如くにして斑石の効用世に喧伝称揚せられ、之を前にしては豊島岡なる皇子皇女の墓碣として宮内省の用命を蒙り之を後にしては敦賀の松原神社々頭の豊碑として採択せらるるあり。現今年々の収額数万金に達するに至れり、これ全く斯翁励精の致す所にして天恵を空うせざる誠意の賚なり。翁は事業担当の能材を具えしと共に臨池揮灑の妙腕を有せり、特に東湖風の筆致に至りては堂の奥に上れり、年八十を過ぎて眼光奕奕燈下細書筆勢衰えず人以て麟士に比せり。其の康健にして高令なるや即位大礼の時と大演習行事の際と二面天盃下賜の聖恩に浴せり。

嗚呼翁の如きは天命の趨く所を察して能く尽くし能く楽しめるも其の寿域九十三の遐に躋れるも亦宜なるかな、身後其の効績を憶い餘蔭を慕うもの相謀りて石を建て功を録し以て不朽に伝えんとす。敢えて梗概を叙する所以なり。

昭和七年五月　　菊池　謙二郎　撰文

杉山　健之介　書

七　檜山義親君紀念碑

マップ①の10

これは檜山先生の弟子数十人が先生の徳をしたって、先生が還暦の時建てたものである。

先生が、維新の激動期には常に若い情熱をもって公事に奔走し、明治維新後は、地方数々の要職にあったことが、細かく書かれてある。

また先生は、多趣味の人で書画泉石等に親しみ、特に深く先生の巾広い人柄を伝え居り友人の平山東里先生が記したものである。

高鈴山の立脚里川の沿岸と接して東隅の一部を作す。是れ本村地徳と称す。地勢山帯の河に襟け空気快通生霊百物ことごとく清爽ならざるはなし。檜山君世々茲にト居す。君名は義親、字は子真、旧称城之介、号は桃里、天保五年十二月二十八日那珂郡南酒出村に生る。本姓片岡氏、義嗣君の三男なり、安政二年八月檜山親芳君の養ふ所となり、檀村也須子と配偶たり、也須子は友部村檀村公達君の二女即親芳君の姓なり、君資性篤孝尤も気節を重す安政五年水戸烈公幕府の譴を蒙り江戸駒込邸に幽せらる国内人心洶々君是れを聞き憂憤已まず同志と共に馳せて江戸城に到り小金井駅に淹留す赤誠尽力雪冤を誓ふ、尋て命あり駒込邸内に宿営す。

元治紀元藩内正奸両党相闘う、遂に江戸邸に訟ふ、君素正党の復南上と上疏排奸国政を回正せんと欲す、当時兇徒横行卿をおうて騒擾す支封守山候に会へ鎮撫の命を奉じて水戸に下る。君諸同志と伴随して薬王院の境上に抵る、何ぞ図らん奸党発炮として入城を拒む、正党応戦以て進撃す君誤りて創傷を負え独り寺内に潜匿す。主僧又能く庇護す居ること数日癒えるをまって途上に出ず追兵の為に捕へられ禁錮極艱會赦を得て間行家に帰る。先の是公子余四摩君命を奉じて護衛す、京師正義の士之れに従ふ者数百人に及ぶ、奸党勢を得て資糧を送らず宿衛之れが為に窘滅す、君有司の亡状を憤り隠然輸送以て其の乏を支ふ。奸党之れを諜知し危機殆と身に逼る。是に於て単身微行東奥に潜居す。明治革新国事悉く旧に復す、君父職を襲へ本村庄屋となる同二年官其の功労を賞して代々苗字帯刀麻上下允可之資格を又大進班卿士傍吏務数料を理む。

五年正月第三大区七ヶ村副戸長を拝命九年地租改正小区総代尋で区画改正擢で第二大区十一小区十五ヶ村戸長を拝命十二年郡区改正更に町屋村外五ヶ村連合戸長となり、準等外三等俸を給せらる。十三年二等に増俸尋で十三等官に補せらる。君常に子弟を督励し嘗て桑田を開き養蚕に従事す。飼方精巧年々其良効を見る余暇即ち泉石を愛し書画を好む。配矢須子温良貞順又能く優美風雅の気韻を存じ嘗三男一女を生み長義誠家を嗣ぎ次義熙任官見在県属、次義寿出て西河内上菊池氏を冒す一女友部樫村氏に適く今茲に甲午君年六十一風骨強壮乃ち画史某をして坐上の双影を写し而て掛幅黄装既に成る。且鳥帽義児数十人相謀り将に紀念頌徳碑を建て撰文を余に徴す、余君と忘年の公而して豫て君一生の履歴之一班故系を知る以て文辞を擱かず乃其の大約を録す。地徳の庄山水明媚の中に在り肖像の扁幅壁門に存す。紀念碑屋上に在り而して清廉の峭真の士其の間嘯に倣す倶に不朽に垂芳すと謂ふ可し。

明治二十七年甲午四月

辱交　平山　寛　撰並に書

八　町屋小学校

▲ 町屋小学校

町屋小学校々歌

作詞　伊藤　正弘
訂正　大町　桂月
作曲　田村　虎蔵

(一)
高鈴山や　黒磯や
向かいて立てる　その中を
流るる川の　水清く
世にすぐれたる　わが村よ

(二)
山より黄金　出ずるなり
畑に煙草も　生うるなり
類稀なる　まだら石
磨けば光　いやまさる

(三)
学びの道に　身を入れて
君と親と　つくしつつ
動かぬ御代の　礎と
後の世までも　仰がれん

◆常陸太田市立 町屋小学校沿革

明治 6年 4月	吉田明正氏宅を校舎として開設
明治 8年 11月	字庫の上に校舎新築移転 「創立記念日とする」
明治21年 1月	字石塚に校舎建築
明治22年 3月	校舎火災のため焼失
明治29年 5月	字石塚に新校舎建築
大正12年 6月	現敷地に校舎新築移転
昭和31年12月	火災のため校舎一棟焼失
昭和42年 4月	同一敷地内の河内中学校は瑞竜中へ統合
昭和50年 8月	プール完成
昭和56年 3月	町屋小学校閉校

九　西河内上小学校

▲ 西河内上小学校校舎全景（昭和21年改築）

西河内上小学校々歌

作詞　塚本　勝義
作曲　柳橋　久作

(一)
春天満の梅の花
真白くみんな　笑う頃
ぼくもわたしも　仲よしこよし
にこにこ真面目に　勉強をして
心みがいて　良い子になろう
西河内上小学校

(二)
秋高宮に織る紅葉
ひらひら風に　踊る頃
ぼくもわたしも　仲よしこよし
にこにこ元気に　運動をして
からだきたえて　良い子になろう
西河内上小学校

(三)
日は山々に輝いて
谷間の清水　歌う頃
ぼくもわたしも　仲よしこよし
にこにこ互いに　励まして
お国かためる　良い子になろう
西河内上小学校

◆常陸太田市立 西河内上小学校沿革

明治 6年 12月	義倉（郷蔵）を校舎として開設 （西河内上尋常小学校）
明治23年 8月	河内尋常小学校分教場
明治26年 3月	西河内上尋常小学校として再独立
大正 元年 9月	瓦葺校舎増築
大正10年 4月	女子補修学校附設（現・公民館）
昭和21年 4月	新校舎改築（本館、炊事場、便所）起工式
昭和27年12月	校歌制定
昭和35年 5月	町屋発電所旧建物を移転し同36年 3月講堂として完成
昭和56年 3月	西河内上小学校閉校

十　河内小学校

河内小学校々歌

作詩　花村　寛
作曲　月岡　弘一

(一)
高鈴の嶺　雲湧きて
流れも清き　里川の
息吹きあふれる　河内小
創造の　心磨きつつ
励まん　われら　いざ友よ

(二)
天満の梅　咲き競い
十国峠の　桜花
精気みなぎる　河内小
親切の　心温めて
学ばん　われら　いざ友よ

(三)
紺碧の空　風薫り
山に川瀬に　鳥が啼く
希望はばたく　河内小
秩序の　心培いて
鍛えん　われら　いざ友よ

◆常陸太田市立 河内小学校沿革

昭和56年 4月	河内小学校の開校（町屋小と西河内上小統合）
昭和57年 1月	校歌・校旗制定
昭和57年 2月	創立記念日（12月17日）の月日を定める
平成 3年 6月	新校舎の竣工式を行う
平成 5年 3月	屋内運動場の竣工式を行う
平成12年12月	河内小学校創立20周年記念誌を発行する
平成18年11月	花と緑の環境美化コンクール中央審査で県知事賞を受ける

十一　鎌倉坂と黒磯岳

マップ①の⑬・⑰

久慈郡郷土史に「黒磯岳、町屋の西南にあり山は高く峨々として聳え清冽の里川其麓を流れ春花秋錦の眺望本郡に冠たり。此地古八幡太郎義家が城を築かんとして、部下と共に山頂に登り地形を検せしを以て名ある所なりと言い傳う。

鎌倉坂、町屋にあり、水戸領地誌云て名ある所なりと言下向い節、此の地鎌倉に似ている所なりとて名附けられしと……」と有る。

此によると、八幡太郎義家が奥州征伐の帰路、当地に立ち寄り、地形が鎌倉に似ており鎌倉坂と名付け、また黒磯岳（二三六メートル）に部下と共に登り築城の見察をしたという言い伝えが残っている。

その他、八幡太郎義家に係る伝説は幾つかあり、町屋橋袂から黒磯岳に入る太郎坂もその一つである。

㊟岳＝旧字は嶽、高大な険しく突き出る山の意。バッケは関東地方北部の方言（崖の意）

十二　薬師堂（福寿院廃寺）

縦 258㎝ × 横 267㎝

新編常陸国誌に「真言宗、茨城郡水戸宝鏡院末、満寿山東光寺と号す、除地九石」とあり、本山の宝鏡院とは如意山大憧寺と云い、太田の寺町に佐竹義人が佐竹氏代々の祈願所として建立された寺であり、馬場八幡宮の別当職をつとめた宥喜法師が開山した。

福寿院は宝鏡院が建立されてから四十七年後、長享二年（一四八八）頃に宝鏡院の末寺として建立された。

寛文三年（一六六三）の開基帳によると檀家は四四八人。その後、幾多の変遷を経て無住職寺となり、天保十四年廃寺となる。

明治十九年に至って火災焼失、宝物「釈迦の涅槃（ねはん）像」は西河内下町智教院に移っている。

今は当時を偲ぶ小字名、寺前、掘の内、寺子屋と、小堂の薬師堂を残すのみである。

（町屋橋袂から三四九バイパスに抜ける市道の北側）

十三　吉田神社

マップ①の7

▶境内の神木は四五〇年

新編常陸国誌に「吉田明神神殿は高八尺、表七尺、妻六尺神体は鏡、八幡を潰（つぶ）し吉田に改む。

前殿は長三間、横二間、鳥居は高七尺、社領は二石八斗三升なり」と有り、また、久慈郡郷土史に「村社吉田神社町屋にあり、日本武尊を祀る。往古は八幡宮にして後冷泉天皇康平年中八幡太郎義家朝臣の鎌倉より遷座す。元禄九年十一月、源義公の銘により八幡を水戸に遷座す。即ち現今の水戸市八幡町県社八幡宮是れなり、更に吉田神社に改む。社高三石あり……」と有る。

此れより吉田神社は日本武尊を祀り本体は鏡である。また、吉田神社は往古八幡宮と称ばれていたものが、江戸時代に吉田神社と改められた。

（町屋宿通りの東側）

十四　町屋金山跡

マップ①の18

町屋金山は戦国時代、佐竹藩により金山として開発され結構な産金があったとされる。しかし、坑道内にたまった水抜きに失敗し閉山となる。

まもなく甲斐の国（山梨県）から来て水戸藩に仕え、利水土木事業に尽くした永田茂衛門親子により再興にあたったが、深堀を続けるうちに坑内の湧水が増え廃坑の運命を辿った。

その後も断続的ではあったが採掘が続けられ、明治時代の末頃には久慈鉱山となり、また日立鉱山も参入する等して、昭和三十五年頃まで採掘稼行した模様である。

採掘跡は黒礫バッケの基部を中心として四十坑程あり、高品位の金（七g／一t）が採掘された模様である。

旧常陸太田市には歴史的金山として「瀬谷」と「町屋」の二つがあるとされているが、町屋金山は瀬谷を遥に凌ぐ金山跡としている。

十五　不動尊

木造の「おびんずる様」が安置され、部落で水田耕作が盛んなころ、日照りが続くと「おびんずる様」を里川に沈め、降雨を祈願した。

また、昭和三十年頃までは町屋に洋裁、和裁教室があり、旧暦の十四日には針供養が行われていた。平成二十年二月消失、同年九月再建。（町屋町「地徳橋」の袂）

十六　熊野神社

和歌山の熊野本宮大社の分社で根本氏の氏神か？　昭和五十四年建立の熊野本宮大社参拝記念碑がある。

石灯籠には寛政九年（一七九七）文政十一年（一八二八）、境内の周囲には

秋山自雲霊神　　年代不詳
〇〇〇〇　　安政六年
足尾山　　年代不詳
稲荷大明神　　年代不詳

等の石宮が鎮座している。（町屋町造宗）

十七　町屋橋

マップ①の3

昭和二年竣工。鉄筋コンクリート造りの全長四十四・四メートル。橋の両端の親柱は石灯籠をモチーフとし、電灯を灯した跡が見られる。橋脚は二重のラーメン式の構造。

地元では、橋の袂にあった旅館「国華」にちなみ、「国華橋」とも呼ばれている。（春友から旧三四九に入り町屋宿通りになる手前）

十八　旧町屋変電所

マップ①の8

レンガ造りの旧町屋変電所は、町屋発電所の変電施設として、明治四十二年に建設され、四十四年には旧太田町、誉田村、町屋に送電された。

変電所は昭和二十年代後半に廃止、その後は公民館施設としても利用された。平成十一年に国の登録有形文化財として登録され、現在は「河内の文化遺産を守る会」と地域の人達により保存・活用が図られている。（西河内下町、町屋宿通りを過ぎ、里川を渡ってすぐ）

十九　央橋（なかばし）

マップ①の14

橋の形がめがねのフレームに似ていることから、地元では通称「めがね橋」と呼ばれている。

平成十五年、国の登録有形文化財に登録。茨城百名橋の一つである。橋長三十四メートル、ローゼ型鉄筋ＲＣコンクリート、アーチ橋・橋台重力式。昭和十二年竣工。平成二十二年土木遺産認定。（土木学会）

（春友から旧三四九に入り最初の橋）

愛宕山

享保八年（一七二三）の供養碑（庚申侍二世祈）には当時の世話人か氏子かの名前が記されている。他に嘉永七年文化四年などがある。昭和三十年頃までは氏子が薬師堂の鐘を背負い、鳴らして子供たちにムスビを配った。

今でも毎年三月末の日曜日に氏子が集まり昔を偲んでいる。

二十　富士神社

創建は定かではないが、大正十三年の改築記念碑文には、社神は「木花開耶姫命（このはなさくやひめのみこと）」として大神は大山祇命（おおやまつみのみこと）……源義公一村一社の制あり、大神を此の所の産土神と崇め給う。明治六年村社に列せられる。大正十一年春頃より御氏子の人々更に従来の神域を広め日を積み月を越え……」吉田坦謹みて記す。となっている。

此により本社拝殿は、大正十一年完成、同時に県より神饌幣帛（せんへいはく）料供進社と指定される。同年十一月厳かに遷座祭行された。

※幣帛（へいはく）＝神前に供えるもの特に御幣

（河内小学校裏手の信号から農免道路に入り、智教院を過ぎ、右手の山の中腹）

二十一　金砂山道の碑

マップ①の15

江戸時代、水戸城下から棚倉を通る大道を棚倉街道と呼び、大変重要な街道であった。市内では太田と町屋に宿場があって大変栄えていた。

碑は町屋の宿から東金砂神社への入口であることを参詣者に知らせたもので、町屋特産の斑石でつくられている。（高さ約八十センチメートル・幅七十センチメートル）（町屋宿通りを過ぎ、西河内入口）

粕塚

碑には「河内村の北…」云々と場所的説明があり、石塚・田中・峯田・北沢四部落の人々が五穀豊穣を祈念し大正七年に建てた。また吉田神社祭礼渡御の折、休憩所となった。もう一つの碑文は判読しがたい。

他に天下泰平（寛政元年）・大乗妙典六十六部日本回圄・他に天明（一七八七）から天保年間に建てられた供養庚申塔がある。

二十二　智教院

マップ①の9

久慈郡郷土史では、京都御室御所大本山仁和寺の末寺にして、高麗山薬泉寺と称し、鳥羽天皇第五皇子本仁の宮（大治四年降誕）が、嘉応三年大覚和尚に命を下し開山した。

その後荒廃したと記されている。『久慈郡郷土史』（宗教新聞社大正十三年五月発行。）

常陸国誌では、文明元年（一四六九）、佐竹氏が太田城主であった時分宥幸上人によって建立。門徒寺は西河内上村、成就院・西河内中村、金乗院・宝蔵院と記されている。（新編常陸国誌村落編）

※水戸宝鏡院（建立は嘉吉二年頃＝一四四二年頃）

佐竹氏が太田城主であった時分、今の常陸太田市栄町にあった。文禄年間まで太田にあり、十九代義宣の時水戸に移った。現存しない。（常陸国誌村落編）

※本尊は、阿弥陀如来。薬師堂には、薬師如来が祀られている。

（西河内下町、農免道路近く）

二十三　お越し場

マップ②の9

西河内ふれあいセンターの裏の山の麓にあり、八重桜・桜・吉野桜と三様の寄植の大木があった。南に棚田を望み風情は抜群である。

昔、薩都神社の神輿が出社し、御邑廻りの時の休憩所であった。八幡太郎義家の腰掛石や庚申塔もある。（西河内中町浅畑、ふれあいセンターの裏手）

「お子馬場（こしば）や
枯れ木と見えし桜かな」

二十四　加波山権現宮

元治二年（一八六五）二月建立。天下泰平、五穀豊饒、家内安全の祈願所として、西河内中・下の信者により祀られた。

祭神は日本武尊。講中世話人二十人の名が石宮に刻まれている。

（西河内中町浅畑から東河内へ通じる山道、加波山頂上までは山道は整備されている）

二十五　有長（永）地蔵尊

マップ②の13

部落の人々が安産と子育てを祈願して祀られた。昔、狐が難産で苦しんでいるところを部落の人が見つけ、この地蔵尊にお祈りしたところ地蔵尊が現れて、狐のお産を助けて無事にお産が出来たと伝えられている程、霊験あらたな地蔵尊。御尊体は九体あるが年号不詳。

（深久保高宮神社の先、戸屋入り口）

二十六　ケンギョウチ寺跡

寺跡で、言い伝えによると、当地に僧侶の学校があり、その師である高僧の菩提であると言われている。

供養塔は十九念仏供養塔、天保五年（一八三四）建立・供養塔碑文為聖霊菩薩、享和四年（一八〇四）、西川内三ヶ村世話人「佐藤作兵衛」、佐渡国賀茂郡槻布施村行者「宗須法師立之」と刻まれ、近くの墓地で供養。現在、寺跡は平坦な雑草に覆われ面影はない。（田畑バス停より少し上、旧道に入った右斜面）

二十七　金砂大道山大石

権現様が金砂山に行こうとしてこの沢伝えに訪れたが、道遠く日が暮れたので、この地を一夜の宿とした。その日は大同元年大晦日だったので此の地は金砂山より一年早く明けたと伝えられる。

昔は天狗も住むなどの言い伝えもあり、鉱泉などもあった。

（西河内上町深久保の杉林の中《廃道に近い》）

二十八　石裂山（お作さん）

マップ②の7

昔の言い伝えに、肥十段つけるより、一度石裂山に詣れ、と言われた程の農業の神様。

碑には石裂山文政二年（一八一九）・庚申待塔明和九年（一七七二）・観音様寛政十二年（一八〇〇）・馬頭観世音大正年間建立等がある。

昔農耕は馬に頼っていたため、その死を哀れみ碑を建てて供養した。

（西河内中町二又と笹原の境）

二十九　愛宕神社

マップ②の2

天満宮に祭られる前の神社。

社地は、天満宮神社と区別され神社の裏手にある。火鎮の神様でどこの地でも高い険しい場所に鎮められている。

（西河内中町、天満宮神社の裏）

三十　笹原地蔵尊

マップ②の5

地蔵尊体は九体あり、一体に延享元年（一七四四）とあるが、残る八体の年代は不詳。

下野国延生の子安地蔵尊を祀り、旧暦の二十三日の夜回り宿で部落の主婦が集まり、安産と子育てを祈願し、御詠歌をとなえて一夜を過ごす行事が行われていた。

（西河内中町笹原旧道上）

三十一　御子（巫女）入不動尊

マップ②の4

昔、御子（巫女）風の者が一人山に入り遂に帰って来なかった。里人は天狗にさらわれたといった。以後、此の地は御子入りと言われ、小さな石宮を建て、御子を哀れみ霊を祀っている。

明治の初期までは近くに鉱泉があり、部落の人や近郷の人が農の疲れを癒した。

（西河内中町笹原から上川淵への農免道路脇）

三十二　割石

マップ②の10

里野宮の薩都神社は常陸二十八社の一つであり、西河内もその氏子になっている。

西河内ふれあいセンターの裏の川渕に大きな御影石があり、西河内中村「菊池左源太重盛」が享保年間この石を使って薩都神社の鳥居を寄進した。その残り石と伝えられている。

（西河内ふれあいセンターの裏手、浅畑と深久保からの沢の合流点）

三十三　文字部供養塔

マップ②の1

供養塔碑文には「大乗妙典六十六部落供養塔」と記されている。

建立は宝暦十一年巳天。西河内中町の旧道脇にあったが、昭和三十二年（上大門～西河内林道貫通）頃か現在地に移設された。

（西河内中町、中山バス停を過ぎ、道路右手の竹藪の中）

三十四　天満宮神社

マップ②の2

昔、山伏が日本三天神として、自分の手で刻んだ天神様を東国に鎮ろうと此の地に来たり、病にたおれ帰らぬ客となった。その山伏が、当時難病とされた天然痘で、村人の苦しむ様子を気の毒に思い、この神を信じる事により病にかからないよう守ってやると言い伝えた。その人の名はいまだに知られないまま神体だけが残されていた。

元禄三年（一六九〇）徳川光圀公の命で建立された。祭神は学問の神様である菅原道真公。天満神像は全国にも珍しい木彫り神像で、昭和三十四年五月、県指定文化財として指定された。

天満宮神社石段脇には、徳川斉昭が国防と武運を祈念して奉納した歌が、碑として地元の篤志家の寄進により建立されている。（西河内中町万宝、大神宮バス停の直ぐ近く、鳥居から急な石段を上る。）

「盾艦（たてかん）を用九（ようく）造りて我乗らば
神の御国の守りならまし」

三十五　万宝地蔵尊

マップ②の3

安産と子供の成長を願って建てた。以前は、五穀豊穣を太陽に祈る天祭りが行なわれ、鐘を鳴らして子供たちに黄粉（きなこ）むすびを与え子供の成長を願った。

碑には天明二年（一七八二）男女講尊・享和二年（一八〇二）二十三夜供養塔・文政六年（一八二三）石裂山之塔講中北西人などがある。

（西河内中町万宝田畑の境、道路の右斜面）

三十六　二十三夜尊

水府との境に位置する一番高い所にあって、昔の生活様式の名残りをとどめている。

お月さま中心に暦ができていた昔、月を崇め二十三夜の月を拝んだ所。

土塀を築き室の中に祭社を安置、山岳信仰の昔が偲ばれる。

（逆久保バス停から右側の山道に入り、仲沢地蔵尊の上。）

三十七　高宮神社

マップ②の12

平城天皇の御代、大同元年（八〇六）闘いの神様として鎮められ、西河内一帯の守護神として崇められていた。

平成五年拝殿新築大修復工事の際、明治六年県提出古文書が発見され、祭神が日本武尊（やまとたけるのみこと）であることが判明した。

水戸藩主徳川家の武運長久祈願所として有名である。

本殿の標札に三代水戸藩主徳川綱條武運長久を祈願と記録されている。

（西河内ふれあいセンターから深久保に入り、東染に通じる林道の右側）

〈神社入口巨木〉

木　名　アカガシ

幹回り　五・四メートル

樹　齢　推定三百十年

三十八　浅畑地蔵尊

六体程あり、一体には天明六年（一七八六）と記されているが、他は不詳。馬頭観音と併設され、お産をすると赤い帽子を被せて健康を祈願した。

元は急な坂の上にあったが、現在地に移設した。

（西河内ふれあいセンターの手前、有平バス停から浅畑集落に入り、道路の右側）

三十九　金壺神社

マップ②の8

産土の命（うぶすなのみこと）を祀る。旧暦六月夜町を催し、山車もあり祭礼が盛大に行われていた。御旗は、秋田県最初の博士号取得者根本通明氏が揮毫。

元社は、参道口の梅林にあったが焼失。梅林は下屋敷と呼び、氏子が管理している。

（西河内ふれあいセンターの手前、有平バス停から浅畑集落に入り、右側の山の中。）

四十　三嶋神社

拝殿の裏に本社が三社あり、右脇に石宮が二社あるが、創建は不詳。本社に納められている「屋根替遷宮札」には、明治十六年願主「田所茂衛門」と記されている。

大正十二年には拝殿創建により清松式臨時祭と記されている。（西河内中町「二又バス停」手前土手を登り杉林の中）

※遷宮…神殿を建て替える時神霊を移すこと。

四十一　三岫春日神社

マップ②の6

三岫の岫は、山にある三つの穴の由来。藤原氏を流れとする菊池氏を祀る神社。熊本県菊池市から神社を運ぶ。

十国峠へ通じる林道近くには、天道さん、お稲荷さん、八聖山などがあり、古くから神仏に深くかかわっていたことがうかがえる。

春日神社は笹原にもあり、同じ菊池氏を祀る神社である。祭神は大山祇命。

四十二　笹原春日神社

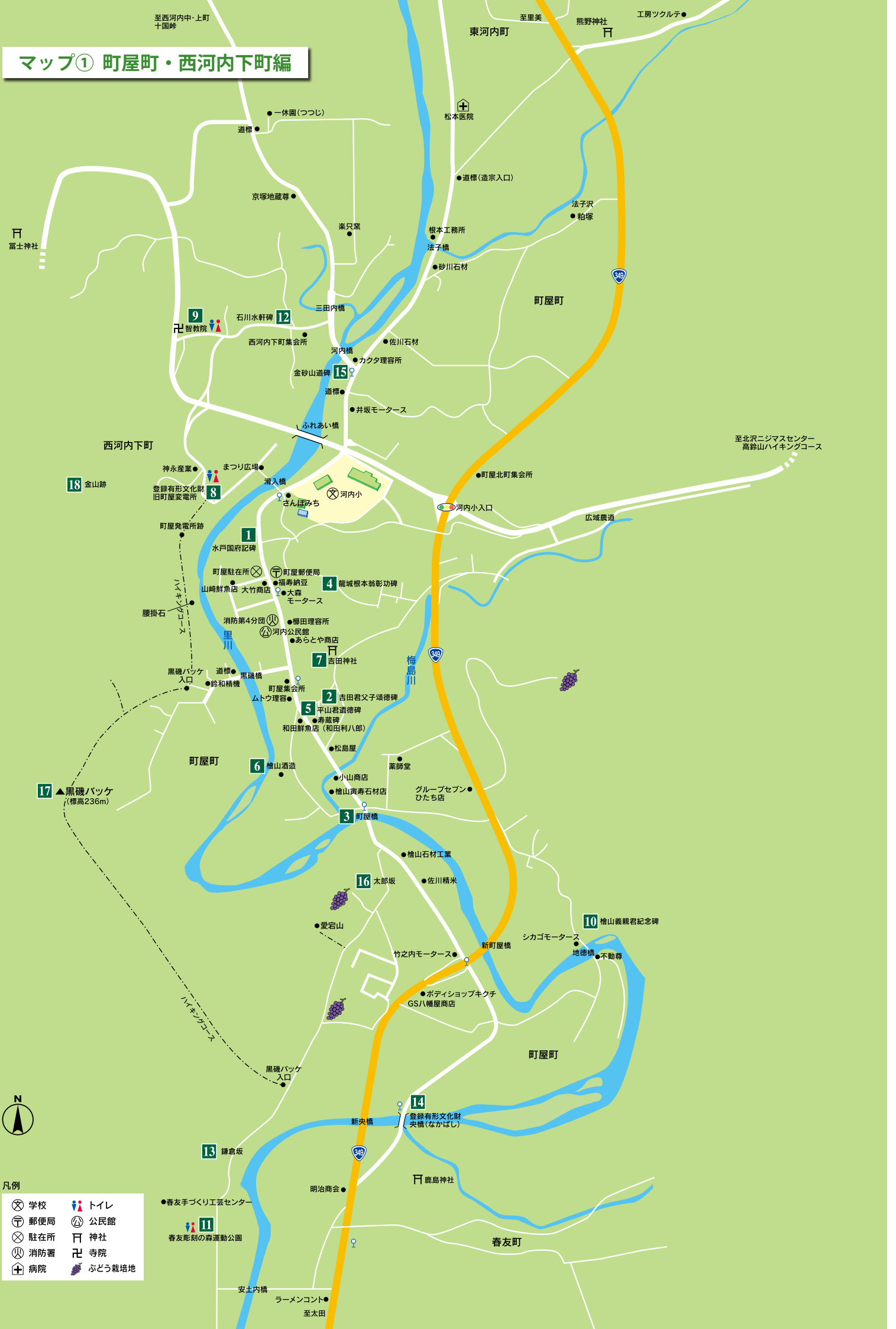
四十三　仲沢地蔵尊

マップ②の14

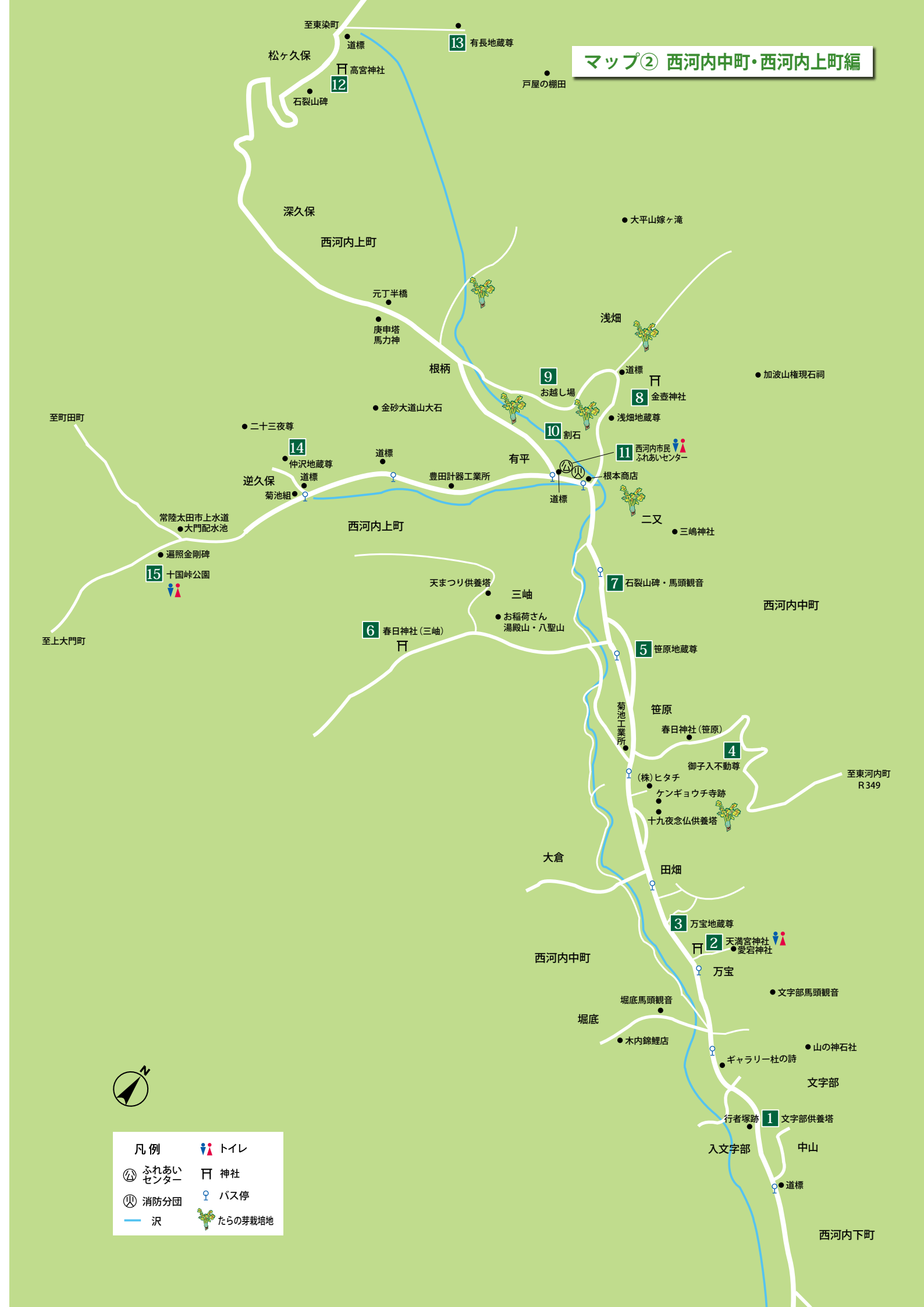
仲沢から水府に通じる旧道の端にあって道標の役目も果たしていた。

地区の人が、安産と子育てを祈願して祀ったもの。旅人は、山中で地蔵尊のあるところに来ると、人家の近さを察知し、安心したと言われた。

マップ① 町屋町・西河内下町編



マップ② 西河内中町・西河内上町編



登録有形文化財　墨彩画

和田晃嶽氏作

「央橋」

「旧町屋変電所」

――あとがき――

平成十五年、退職を期に帰郷した時、「河内の文化遺産を守る会」とめぐりあいました。その後、会では河内地区内の史跡や建造物など、まとめ上げた冊子を創ろうとの話しになり、末席に座らせて頂きました。

帰郷して四十年ぶりに地区内を歩き廻り、時には道なき道を探りあて、ヤブ蚊に刺されながら取材しました。そして、この地区の千二百年もの歴史の深さに感動し、自分としても計り知れない知識を得る事が出来ました。

取材にあたっては、多忙の中、作業中にも拘わらず手を止め足を止めて、情報提供、そして案内までして下さいました地域の諸先輩の方々に心より感謝申し上げます。

まだまだ未確認の部分がありますが、参考になれば幸甚です。

尚、本誌の発行は常陸太田市市民提案まちづくり事業の一環として企画しました。

檜山　浩

《参考文献》

『いしぶみ』・河内公民館

『ふるさとを探る』・西河内上子供会後援会

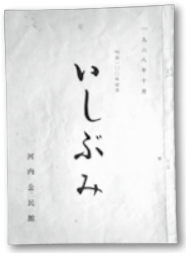
『常陸太田市における生活環境の地域的特性』・筑波大学地球科学系人文地理学研究グループ

『西河内聞きある記』

『常陸太田史誌（民俗編）』

『久慈郡郷土史』

『新編常陸国誌』



冊子「いしぶみ」

冊子「ふるさとを探る」

発行日　平成二十三年三月三日

編集・発行者　河内の文化遺産を守る会

編集責任者　檜山　貞人

撮影責任者　檜山　浩

印刷　山口写真製版印刷

（製作協力：茨城出版企画センター）

春のお越し場